

MOUT の意味と位置について

散文トリスタン物語第 2 巻を中心に

伊 藤 了 子

0. はじめに

古フランス語の MOUT は意味的にも、文中の位置に関してもその振舞いが自由奔放にみえる。韻文作品はいうまでもなく、散文、とりわけ物語文学のテクストにおいてその自由さが目立つ。本稿では 13 世紀末の散文を選び、その中で MOUT がどのように用いられているか、特に MOUT の意味と位置を中心に考察する。

作品には「散文トリスタン物語第 2 巻」(以後 TP.) を選んだ。第 2 巻である理由は、第一巻は構えて書いているかもしれないから、2 巻のみであるのは、用法を検討するにはひとつひとつの用例を文脈の中で考える必要があるので時間的制約という理由からである。「トリスタン」である必然性はなく「ランスロ」でも「アーサー王の死」でもよかった。TP. 第 2 巻のような小範囲の用例を分析して仮説を立て、それが他の作品にもあてはまるかどうかをみるという方法を取る。本稿では MOUT の意味と位置に関する仮説を立てるところまでを記す。

一般に語句の位置(語順)について考察するとき、従節と主節を分けてそれぞれ別に論じられることが多いが、本稿で扱うのは MOUT そのものの意味と位置であって、談話の観点からのアプローチではないので、主節と従節は区別しない。

以下、MOUT という記号を用いるがこれは molt, moult, mout, mot, mut,

etc. すべてを含む。他に, Sn: 名詞主語, Sp: 代名詞主語, V.: 動詞, X: 目的, 状況, 様態補語, F. T.: Frantext, D. T.: Discotext 等の記号を用いる。また, 引用例に特に出典を記していないものはすべて TP. からのものである。

1. MOUT と動詞との意味的親和性

この章では一般論として, MOUT と動詞の意味的な相性を考える。まず, MOUT 自身の意味, 次いで動詞との関係を見る。

1. 1. MOUT の意味

MOUT の基本的な意味は, 多数・多量という不定量である⁽¹⁾。MOUT の品詞は理論的には形容詞 (> 名詞) も副詞もありえるが, 後に示すように TP. の MOUT の多くは副詞として用いられている。形容詞的用法としては, 単独使用の MOUT と ESTRE (あるいはコピュラ動詞) との組み合わせ (*MOUT-ESTRE(-X/Sn/Sp); *ESTRE-MOUT(-X/Sn/Sp)) がないので, TP. には属詞としての形容詞の MOUT は存在しないといえる。付加形容詞としては, それと確定できないものが一例ある⁽²⁾。また, 名詞としての MOUT の使用は非常に限られており, avoir の直接目的語として用いられている 3 例のみである。したがって以下では主に副詞の MOUT を取り扱うことになる。副詞の MOUT には, GREIMAS も示しているように, 大きく分けて 2 つの用法がある。動詞にかかるもの (これを本稿では「MOUT の単独使用」と呼ぶ) と, 形容詞, 副詞(句)にかかるものである。

1. 2. 量・度合の概念と動詞の関係

動詞は事行が展開するときの仕方(「どのように, どんなふうに」)の表現を伴うことがある。例えば aimer の場合, 「どんなふうに愛する(愛している)か」と問われたら, 人の数だけあるいはそれ以上の愛し方があり, それをこと

ばで表現することが可能である。その中には子供の占いで菊の花びらをむしりながら唱えられる《*aimer un peu, beaucoup, à la folie, pas du tout*》も含まれる。つまり *un peu* や *beaucoup* はこのパラダイムでは愛の度合・程度のある段階を表しているが、しかし本来は量の表現である。観点を変えれば、量の表現が度合・程度の表現として用いられているといえる。

「量」と「度合」は辞書に次のように定義されている。

- (1) 量：「大小の比較の可能なものや、測定の対象となるものについて、その長さ、重さ、時間、個数などをいう。また、測定して得られた数値や限度となる分量」(国語大辞典)
- (2) *quantité* 1. Propriété de ce qui peut être mesuré ou compté. 2. Mesure qui détermine une portion de matière, une collection de choses ; poids, volume, nombre . (GDEL)
- (3) 度合：「性質や状態の深浅・濃淡・強弱・高低・優劣などをはかってみてそこに表出される結果。程度。……」(国語大辞典)
- (4) *degré* : 3. Intensité relative d'un état, d'une qualité, point atteint par qqch . さらに , *Gramm.* Niveau d'intensité variable (égalité, infériorité, supériorité) auquel peut être porté le concept exprimé par un adjectif ou un adverbe . (GDEL)

(1)~(4)によると、「量」と「度合・程度」の違いは、量が具体的であるのに対し度合・程度は「性質や状態」が関与するので抽象的であることにみられる。しかしその違いは明確ではなく、すでに上で述べたように狭義の「量」は「度合・程度」に簡単にスライドする。GREIMAS は *Quantité* という語を、「度合・程度」を含む広い意味で用いている。

動詞の表す概念は抽象的なものであって、動詞の概念の量や度合を計る物差はない。しかし動詞の概念といっても様々で、*changer* や *varier* など変化を表す動詞のように「度合」を内包しているため度合・程度の副詞と結びつきや

すいものもあれば、commencer, finir のなど事行の開始点、終点のみをマークするような動詞は「度合」を内包しておらず、他に必要十分な条件が付加されなければ量・度合の副詞と共に用いることは起こりにくいという動詞もある。

しかししたいの動詞は、動詞の意味的性格以外に、動詞の時制によって付加される反復（＞回数）、完了（＞状態）、継続（＞時間的長さ）などによって、また事行主体や目的補語の性格によっても、量、度合・程度の概念に結びつくことが可能になったりする。

たとえば現代フランス語で《Il parle beaucoup.》といえば、口から出ることばの数の多いことを示すが、《On parle beaucoup de cet acteur.》という主語が on であることによって「不特定数の人々」という意味が生じる。現在時制であることから、反復、継続等の概念が加わり、さらに量の副詞が加わると、「多くの人が話している」、「あちらでもこちらでも……話している」というように、文脈によっては、ある時は事行主体の数の多さ、あるときは空間的広がり、あるときは時間的広がり、あるときはこれらの2つあるいは3つを同時に含んだ意味をも表し得る。

《aller, venir, sortir, mourir》のような「状態の変化を伴う移動動詞」でさえ、発話者がその気になれば、つまり量的に捉えようと思えば《beaucoup》と共に用いることができる。

- (5) Et vous, monsieur Alexandre vous sortez beaucoup? (F. T.)
- (6) Suivant les époques, on y meurt peu ou beaucoup. (F. T.)
- (7) Quand j'étais mome, tout mome, nous allions beaucoup à Ablon, (F. T.)
- (8) Nous vivons très retirés en ce moment, nous ne souhaitons pas que les gens viennent beaucoup ici. (F. T.)

以上から、次のような仮説を導くことができる。

- (9) 発話者が事行を「量的に」捉え、そのように表現したいと思えば, beau-coup や MOUT のような量の副詞と共に用いることができる。

この仮説にもとづいて, 次章で位置との関係をみながら, 問題のある MOUT に関して検討する。

2. MOUT の位置

TP . における MOUT は位置に関して次の 3 つに分類できる。

- (10-1) MOUT adv. × 264, MOUT adj. × 110
- (10-2) V. MOUT × 15
- (10-3) MOUT V. × 99
 - a MOUT V. × 23
 - b MOUT V. adj./adv. × 76

(10-1) の数字は, MOUT が形容詞や副詞の表す性質や状態の度合を示すとき, 形容詞・副詞(句)の直前が MOUT の標準的位置であることを示している(例 11-16)。副詞句の中には(13)のように前置詞句も含まれる⁽³⁾。

- (11) La damoisele pleure fort, com cele ki **mout durement** s'esmaie ⁽⁴⁾
- (12) Vous plouriés ore **mout tenrement** et chis vallés autresi,
- (13) Dynadant, qui a celui point venoit a la jouste **mout a envis** et le fiert en son venir . . .
- (14) La u Lancelos chevauchoit ensi, il trouva **une mout bele fontainne** en une praerie ;
- (15) Je sui **mout liés** de lour venue!
- (16) Palamidés, ce sai je bien, est **mout boins cevaliers** durement,

単独使用の MOUT の位置は、動詞の左（10-3 a）の例も右（10-2）の例も存在する。V の左に何か文の要素（主語、目的補語、状況補語、SI 等）がある時、MOUT は動詞の右にある（17, 18）。

（17）et il fu auques bien montés a sa volenté et **mout** li plot.

（18）Chertes, fait mesire Tristrans, *ce* me plaist **mout**, puis k'il . . .
（ce は主語）

TP . における単独使用の MOUT との共起例が見られる動詞としては次のものが挙げられる。

（19）amer 《aimer》, aseurer 《rassurer》, avoir, comander, croistre 《croître》, s'esforcer, s'esmerveiller, s'estudier, douter a inf., faire, ferir 《férir, frapper》, se fier, se garder 《prendre garde》, hair, honorer, merveiller, parler, penser, peser, plaire, priser 《évaluer, apprécier》, proier 《prier》, se reconforter, regarder, server, tarder, vouloir.

第一章で述べたようにこれらの動詞は意味的にどれも容易に MOUT と結びつくものである。（20）は唯一、MOUT が隣接動詞にかかっていない例である。

（20）Quant Persidés ot et entent ce que la damoisele li dist, il commenche **mout** a penser et en cel penser se commenche **mout** a merveillier.

commencer は、ある状態や行為の開始点のみを表す。この「起動、開始」の概念は「量」とも「度合」とも無縁である。少なくとも MOUT は commencer

のみにかかるのではない。最初の MOUT は *penser* に、二番目の MOUT は *merveiller* にかかると解釈するのが自然であろう⁽⁵⁾。

われわれのテキストにおける MOUT は、以上のような単独使用の例 (10-3-a, 17~20) あるいは単独使用でないことが明らかな例 (10-1, 11~16) が大多数を占めるが、どちらなのか明確でない例も少なからずある。それは MOUT V. の後に形容詞あるいは副詞を伴っているケース (10-3-b) である。

2. 1. MOUT V.

MOUT V. とは見たとおり MOUT が動詞の左に位置する文である。V. の右に形容詞や副詞が存在しなければ、上で見たように、この MOUT は単独使用であり、動詞あるいは述部の表す事行の概念の度合いが高いことを表す。しかし、動詞の右に副詞や形容詞が存在するとき (MOUT V. adj./adv.), MOUT が動詞にかかるのかそれとも動詞の向こう側にある副詞、形容詞にかかるのかという判断は、音声による情報が得られない状況では、容易でない。

2. 1. 1.

次のような文頭の MOUT は、標準タイプの MOUT adj./adv. の MOUT が何らかの理由で分離して左方に転位したもののなのであろうか。それとも単独使用の MOUT と同じように動詞にかかって意味的にひとつのまとまりを構成しているのであろうか。

- (21) **Mout** i ot de **biaus** caus donnés et de **beles** joutes faites,
- (22) **Mout** pensa **durement** Palamidés cele nuit a son courous et . . .
- (23) **Mout** a **grant** **doeil** Palamidés (**grant** **doeil** = avoir の目的補語)
- (24) mout s'esvertue et **mout** s'esforce de **grant** maniere
- (25) Mout fiert et **mout** se deffent **fort**,
- (26) **mout** emprendroit cil **grant** cose a faire (cil = 主語, grant cose = 直

接目的補語)

- (27) **Mout** li tourne ceste parole a **grant** desdaing et a **grant** despit
(torner)

MOUT V. adj./adv. の動詞の中には、単独使用の MOUT と共に用いられている動詞のリスト(19)の中に見い出されるものとそうでないものがある。前者は、s'esforcer, s'esmerveiller, penser, peser, proier, regarder である。これらは、単独使用の MOUT と共に用いられるときにそうであるように、MOUT V. でひとつの意味的まとまりを作っていると考えられる。そうでなければ次例(28a)の下線部分と(28b)の下線部分の性質が違うものになってしまい、混乱が生じるであろう。

- (28a) et mout s'esmerveilloient pour coi
(28b) mais mout s'esmerveille durement pour coi

この説は、観点を変えれば、(29a)と(29b)とでは MOUT のかかるものが違うことを意味する。

- (29a) mout s'esmerveille durement pour coi
(29b) il s'esmerveille mout durement pour coi

(24)(25)のような MOUT V. et MOUT V. adj./adv. という文や、(26)(27)のように V. と後続の形容詞との間に他の文要素が介在するような例の存在はこの説が正しいのではないかと思わせてくれる。

しかし、この説はすべての例にあてはまるわけではない。次節でそれらを検討する。

2. 1. 2.

(30) et **mout** les apela **bel** (apeler):

(30) の MOUT は apeler の回数が多いことを表しているのではない。apeler bel は成句的表現で歓迎《accueillir aimablement》を意味する。そうすると、MOUT は appeler にかかるのではなく、質を表す bel、あるいは apeler bel 「歓迎する」という動詞句全体にかかると考えられる。(30) から MOUT が動詞句にかかるという図式が加わる。

目的補語名詞が前置形容詞を伴うばあいはいは自立性がより高くなるので成句として捉えることが難しくなる (31) (32)。

(31) et **mout** li fist **grant** joie et **grant** hanour , (faire)

(32) car **mout** m' avés faite **grant** deshounour (faire)

それでも、(31) (32) の MOUT は V . と一体であると自然に解釈できる⁽⁶⁾。「(彼に対して) 大いにした」何を? 「大きな喜びと大きな栄誉を / 大きなはずかしめを」。自然であると感じさせる要因は、動詞に続くのが目的補語であることであろう。

(33) ~ (35) は少し異なる。

(33) Se cheste grans paours ne fust, **mout** se fuissent encore **miex tenu!**
(se tenir)

(34) S'il osast refuser la joust, mout le refusast **volentiers** . (refuser)

(35) , **mout** apert **bien** la soie trache . (aparoir) 「現われる」

(33) の se tenir は bien と共に用いられると「しかるべく、立派に振る舞う」という意味を表す。MOUT は、もちろん fuissent にかかるのではなく、

se tenir のみにかかっているというのではない。むしろ miex に関係するのであろう。

(34) が表現したいのは、MOUT を除けば、「もしも彼に一騎討ちを断る勇氣があるならば、(それを) 進んで断ったであろうに」である。「(それを) 大いに断ったであろう、進んで」はどこか不自然な気がする。他の箇所では refuser は du tout (4 例)、tout plainnement (1 例) のように 100 パーセントを表す表現や、en toute maniere (2 例)「断固として」のような様態補語と共に用いられている。おそらく refuser は不定量を表す MOUT とはあまり相性がよくないのであろう。しかも一般に不定量と共によく用いられる volentiers の存在が refuser と MOUT の一体感をさらに沮害しているように思われる。

(35) も MOUT aparoir を「大いに現れる」と解釈するのは不自然である。この aparoir は非人称動詞として用いられていて、「何が？」の答えが要求されるのに、「はっきり」というような事行の様態補語が続き、その後に「何が」に相当するものがきているからであろう。他の箇所の aparoir は bien (5 例)、tout plainnement (1 例)、encore (2 例) と共起している。bien (5 例) が示すように、aparoir は質の概念を表す副詞との方が親和性がある動詞であるといえ、したがって MOUT は bien にかかってその度合を高めていると考えられる。

次例(36)は文脈から判断すると「(生きて逃れることができたので) よかった」という文なので、この MOUT は avenir 《il arriver (非人称)》にかかって「(que 以下の事柄が) 大いに起こる」という意味を表すのではなく、むしろ bien にかかると考えられる。TP . の、他の avenir は trop bien, si bien (...com), en tel mainiere, comment など「質」の副詞を伴っている。

(36) , et mesure Tristrans dist que voirement fu chis fais bien perilleus pour ce que Palamidés estoit armés, et **mout** li avint **bien** quant il em pot escaper vis ;

以上, (30)~(32) のように量・割合の概念との親和性が高い動詞・動詞句を除いて, 本来 MOUT との親和性が低い動詞 (33-36) のばあい, (9) の仮説にかかわらず, 動詞の右側に MOUT と結びつきやすい形容詞や副詞があれば, 位置に関係なくそれらの要素と結びつくと考えられる。

コピュラ動詞としての *estre* に関しても同様である⁽⁷⁾。

(37) **Mout est dolans et courechiés** de grant maniere mesure Tristrans
de ce que Breüs li est ensi escapés.

(38) **mout** nous est **bel** que vous le nous avés dit, car ...

(39) **Mout** est li rois March **esmaiés et espoentés** de ces nouveles.

MOUT EST は聞き手に多くを伝えない。(37) の語順 (MOUT EST 属詞 - 様態補語 - 名詞主語) であれば <est dolans et courechiés> という述部が表している状態を MOUT が強めているという解釈が導かれ得る。(38) のように, 動詞 - 属詞というより, *estre* と形容詞 *bel* で《plaire》という意味の成句的表現を構成している例においてはそのことはより顕著である。しかし, (39) のように ESTRE と属詞との間に名詞主語が介在するような例が出現するや, ESTRE と属詞の一体感の解釈はあまり説得力がなくなる。

確かなのは, コピュラ動詞 ESTRE の役割は主体と属性を連結し, その二つが一致することを表すだけであるから, 事行そのものに量や割合の概念が介在する余地はないということである。

結局 (37)~(39) に共通して言えることは, MOUT は動詞の右の形容詞と関係を持っているということである。

2.2. 分離・左方転位か否か

以上, 様々な例を検討してきたが, MOUT V. は次の3つのタイプに分類できる。

1) MOUT V. を一体と考えることが可能なもの。

[MOUT V .] adj.N/ adv.

- 2) MOUT が、動詞一語のみではなく、動詞と共に成句表現を構成している
目的補語・副詞をも含んだ述部全体に作用すると考えることが可能なもの。

MOUT [V. adj.N./ adv .]

- 3) MOUT が動詞を超えて形容詞や副詞に作用すると考えることが可能なもの。

MOUT [V .] adj.N./adv . (V . は estre 以外)

MOUT [EST] adj.

これら 3 つのタイプのどれにもあてはまる、MOUT の機能の解釈は、分離左方転位説、つまり本来形容詞や副詞の直前に位置してそれらの性質や状態の度合を示すはずの MOUT がなんらかの理由で左方に転位したものであるという考え方である。この説は単独使用の MOUT V . の MOUT を説明するものではないが、MOUT が V . の左にあることの意味は同じであるはずである。

3 . おわりに

結局、すべての MOUT V . を、MOUT は動詞にかかるという仮説 (9) により説明することはできないということが明らかになった。MOUT の動きはもっと複雑で、なんらかの必要性があれば本来の位置を離れ、動詞の左に移動することがあるということになる。

MOUT がなぜ左方に転位されるのかについては、談話の観点からのテキスト分析が必要である。この問題に関しては『年報フランス研究』2001.12 に「MOUT V . の意味と効果 談話の観点から 」と題して発表の予定である。

注

(1) GREIMAS, GODEFROY.

(2) un chevalier de Norgales, **mout** preudome des armes の preudome は語源的には形容詞 preud + 名詞 ome なので、この MOUT は文法的には形容詞かも知

- れないが、意識の上では副詞かも知れない。
- (3) 現フランス語：très en colère にもみられる。
- (4) TP . には (11) のように MOUT adv が動詞に先行する MOUT adv . + V は 8 例あるが、すべて従節中である。MOUT adj . + V は主節にも従節にも見られない。*Les miracles de Saint Louis* には ESTRE 以外なら存在する。Et comme il eust esté une piece afebloié, si com il li estoit avis, il se leva, et **mout afebloiez** ala par soi, apuié d'un baston que il avoit en. . . . *FOUKE le Fitz Waryn* には従節なら 1 例のみ存在する。Isorie prist sa harpe, **qe molt riche fust**, e fist descaunz e notes pur solacer Fouke, quar le vist bel e de cortoise porture . 従節 **qe** (= **qui**)
- (5) *Les Miracles de Saint Louis* にも同様の例が二つ存在する。
- (6) 現代フランス語でも《faire beaucoup (pour . . .)》という表現はしばしば見られる。しかし「尽す、貢献する」というニュアンスを含んでいることが多いようである。
- (7) MOUT EST の後に形容詞が来る文は TP . では全部で 25 例ある。

参考文献

Le Roman de Tristan en prose Tome II, Edité par Marie-Luce CHENERIE et Thierry DELCOURT, Droz 1990

A. J. GREIMAS (1969) : Dictionnaire de l'ancien français, Larousse

F. GODEFROY (1961) : Dictionnaire de l'ancienne langue française

GRAND DICTIONNAIRE ENCYCLOPEDIQUE LAROUSSE (1980), Paris

「日本国語大辞典」(1973) 小学館

伊藤了子 (1996) : 「強調の副詞 Mout の位置」『人文論究』46-1, 関西学院大学人文学会

Disotext 1 : Textes Littéraires Français 1827-1923, HACHETTE

Frantext (特に 1950-2000 の, 詩・パンフレット以外の分野) <http://zeus.inalf.cnrs.fr>

文学部教授